

5 8月9日視察最終日（日本時間：8月10日）

(1) ブラジル視覚障がい者スポーツ連盟²⁶ヒアリング

視察時間：10：00～11：30

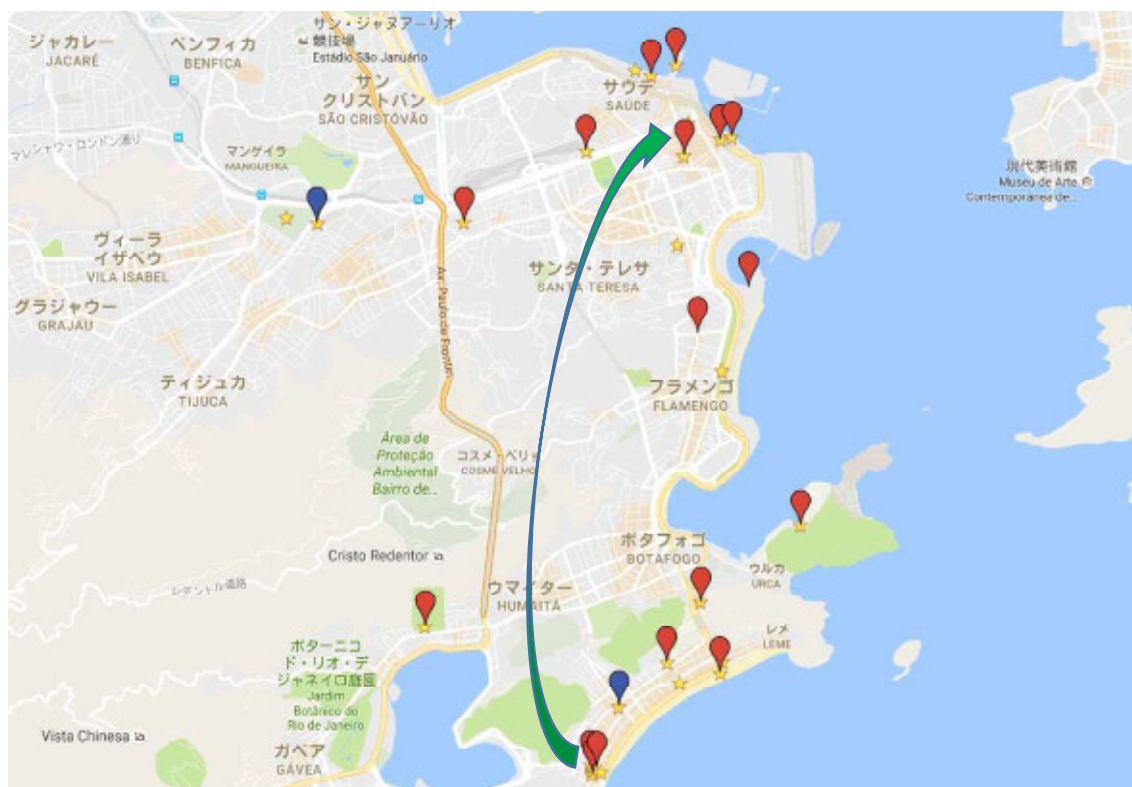


図 2-20 宿泊ホテルとブラジル視覚障がい者スポーツ連盟の位置関係 Google Map より筆者作成

視察最終日はミーティング後、チェックアウトして目的地がある Centro 地区に移動（図 2-20）（9：00～10：00）した。

物販店舗が混在するオフィスビル（写真 2-184）の一室（2-185,2-186）にブラインドサッカーを含むブラジルの視覚障がい者スポーツ



写真 2-184 オフィスビル 筆者撮影

を統括する連盟がある。多忙を極める連盟の SANDRO LAINA 会長（名

²⁶ ブラジル視覚障がい者スポーツ連盟（CBDV） <http://cbdv.org.br/>参照 Centro 地区

刺 2-9)から好意的に
ヒアリング (写真 2-
187) することがで
き有意義なものとな
った。障がい者スポ
ーツの支援は競技
力、社会的関心双方
の向上の側面から考
えることが出来る。
競技者または団体と
して上位成績を目指
すことは当然であ



名刺 2-9 筆者名刺交換



写真 2-185 連盟の入口 筆者撮影

り、この点では施設面や事務局機能が国の支援により数年来、他国に引けを取らない整備がされてきた。実際に、お国柄としてブラインドサッカーは、パラリンピックや国際大会では世界最強国であり、メジャー競技として位置付けられているが、多くの競技は困難を抱え続けている。自国開催までの準備期間は障がい者スポーツ支援体制の飛躍的な向上となったが、これらの支援や環境整備には、社会全体の関心が欠かせないと強調されていた。リオ市をはじめ国内の日常生活圏のバリアフリーとして、ハードソフト両面においてほぼ未着手であり、両筆者の目にも同様に映った現実がある。しかしながら自国開催の意義とチャンスは鮮明に表れていた。これまで遅れをとっていたとしても、競技場には



写真 2-186 室内の様子 筆者撮影



写真 2-187 ヒアリングの様子 筆者撮影

は配慮されたスロープや観覧席、エレベーターが整備され地下鉄の駅には点字ブロックや理解できるサイン表示、まちなかの歩道では、行き届いてはいないが段差解消などの努力が見られる。これこそがバリアフリー後進国が先進国に向かう一筋の光であり、これがさらに加速す

ることの一つのレガシーとなりえる実例と確信した。同時に自国開催へ向けて学校を中心とした理解促進の教育に力を入れ取り組んできたことも紹介された。競技紹介から福祉への知識まで、学びから関心を持ってもらう未来への投資の重要性を感じた。

品川区へのキャンプ誘致に関して、高い関心を持ってもらったと感じ

る。なぜなら、宿泊環境、宿泊場所から練習会場への距離、グラウンドの芝の状況など具体的かつ細かな質問がなされ、視察団も誠意と具体性をもって答えられたと考える。何より連盟にとっても直接、招致 PR を受けたのは初めてである点では評価されたと考える。親日のお国柄の中、2020年に向けた初めての「招致団しながわ」の印象を今後も活かせる権利を続ける事が何よりも大切なことである。

上記で記載した通り、品川区は現地で頂いた「ご縁」をさらに深める必要がある。今後もメール等でのアプローチは欠かせないものであり、引き続きキャンプ誘致実現のため活動して頂きたい。無論、連絡先の交換も行い今後の展開に余念がない。最後に会長と視察団は写真を撮った。(写真 2-188)



写真 2-188 会長と集合写真 通訳ガイド撮影

(2) 文化施設における機運醸成策視察調査²⁷

視察時間：12：00～12：40



図 2-21 視覚障がい者スポーツ連盟と Escadaria do Selaron、
昼食場所の位置関係 Google Map より筆者作成

セラロンの階段（写真 2-189,2-191）。今は観光名所だが、住宅街の階段にタイルを張り巡らしたことが、現代アートとして評価され、多くの人々が集う拠点となっていた。都市型観光の定義として、日常生活を観てもらふことがあげられるが、住宅地にタイルによる表現で人々の関心を集める発想に感心しきりであった。タイルにも絵画やデザインがなされ、そのきめ細かさを一つ一つ追う楽しみも特徴的。中には阪神タイガース（写真 2-190）のタイルも発見することができた。数百段の階段の途中や周辺には簡易的なホテルも確認できた。

²⁷ Escadaria do Selaron Centro 地区 チリ人アーテ 1947 年生 2013 年 1 月 10 日没
https://en.wikipedia.org/wiki/Escadaria_Selaron 参照



写真 2-189 セレロン階段 筆者撮影



写真 2-190 阪神のタイル 筆者撮影



写真 2-191 セレロン階段 筆者撮影



写真 2-192 セレロン階段途中のホテル 筆者撮



写真 2-193 危険 筆者撮影



写真 2-194 詰まったトイレ 筆者撮影

しかし一般のゲストが安全性を考えるのであれば宿泊するには多少の抵抗があることは否めない。一方で、リオ市の課題であった宿泊施設の整備は、東京競技大会においても同じ課題を突き付けられるだろう。品川区においても民泊の制度や旅館業法の緩和による簡易宿所の取り扱いや制度をどのようにするか早急に議論するべきと考える。ゲスト

のターゲットを絞ることも必要なのかもしれない。こうした現状から宿泊施設の必要性等を検証する品川区観光マーケティングを実施することも必要である。

観光名所の一つであるが付近の路上には数人（写真 2-193）がたむろしている。現地ガイドは絶対に振り向かず目を合わせないこと。と視察団に注意を促した。

先ほど宿泊施設について触れたので、ここでホテルチェックアウト時のトラブルについて触れる。ブラジルでは基本、トイレにペーパーを流すなど来伯前に言われていた。案の定トイレは詰まった。（写真 2-194）ルールは守るべきである。こうしたルールは東京大会開催時にも必要である。品川区内には多くの公衆便所がある。各国でそのルールは様々だが、公衆便所は一般の区民が日常生活圏の中でも利用する。日本のトイレの使用についてはピクトグラムやサインを掲げ注意喚起を促す必要があると考える。

昼食のため Shopping Rio Sul（ショッピングセンター）（写真 2-195）へ移動（図 2-21）（12：40～13：15）各自で昼食（13：15～14：15）をとる。相も変わらずフードコートでの昼食。（写真 2-196）ポルトガル語ができなくても注文がスムーズにできるようになった。ブラジルでは料理がくるまで時間がかかるため携帯電話の翻訳ソフトで「集合時間があるので早く」と伝えると今まで以上に早く手元に料理（写真 2-197）が届いた。

今まで立ち寄ったショッピングモールより多少コンパクトであるが店内のエレベーター前には点字ブロック敷設（写真 2-198）されバリアフリーの表れを感じた。日本ではあまり見かけないが、エレベーターのドアには広告（写真 2-198）が貼られていた。こうした発想も必要で税外収入の観点からみても品川



写真 2-195 ショッピングセンター入口 筆者撮影



写真 2-197 味が濃い食事 筆者撮影

区として研究することも必要と考える。以前はこうした広告を庁舎内等に貼ると「特定の企業を行政が肩入れしているのか」等の声も聞いたが、現代社会においては、もはや時代遅れの声である。フロアの中にはボルダリング（写真 2-199）の体験イベントが開催され、子どもたちも楽しんでいた。

こうした、民間企業の様々な取り組みは行政が立ち入るスキがないかもしれないが、賑わい創出の観点からも参考にしてみたい。



写真 2-198 エレベーターと
点字ブロック 筆者撮影



写真 2-199 ボルダリング体験
筆者撮影



写真 2-200 灰皿付きごみ箱 筆者撮影



写真 1-201 トンネルに設置された
オリンピックの看板 筆者撮影

ショッピングセンターの目の前を幹線道路であるラウロ・ソドレー通りとヴィンセスラウ・プラス通りのトンネルの出入口には、それを横る形で巨大なオリンピックの看板が設置され盛り上げや賑わいの一つに感じた。上記で通りの名称を記載した。リオ市内の幹線道路は一方通行が多い。目的地を通り過ぎれば、戻るまでに大回りをしなくてはならない。時間もかかる。これが道路事情である。こうした事情もあって

なのか、諸外国では普通なのか主要な通りには全て名称がある。地図を見ても分かりやすく目的地に移動ができる。今後の外国人ゲスト増加を考えると、品川区も既に主要な区道に愛称名を付けているが、さらに分かり易い対応を望む。このことはゲストがスムーズに目的地にたどり着くためにも必要と考える。

歩道上には灰皿一体型のごみ箱（写真 2-200）が設置してあった。昼食後セーリング会場へ移動。（図 2-22）（14：15～15：00）

(3) セーリング会場周辺公園調査²⁸

視察時間：15：00～15：30



図 2-22 昼食場所とセーリング会場、Catete 駅の位置関係 Google Map より筆者作成

²⁸ ボランティアピアリング等

Shopping Rio Sul から、幹線道路の中州部分に広がる Parque do Flamengo (フラメンゴ公園) (図 2-22 A) までバス移動しセーリング会場まで徒歩視察を行った。海辺に広がる海岸公園の一部にセーリング会場があるが、会場敷地以外のビーチどこからでも競技の性質上、観戦することが出来る (写真 2-202)。もともとの海岸の整備として、ビーチバレーボールが出来るネット (写真 2-203) が並んでいるが、健康づくりのニーズも高く、自治体が設置した健康器具が所々に見受けられた。浜辺には常設か臨時かわからないがテント内で飲料等を販売する出店 (写真 2-204) もあり、ビーチバレーボールやビーチサッカー (写真 2-205)、スラックライン²⁹ (写真 2-206) を楽しむ若者たちのオアシスにもなっていた。目の前でセーリング競技が開催されていたが、その雰囲気は感じられず、日常の時の流れとなっていた。

通りがかりのシャツにハーフパンツ姿の中年男性 (写真 2-207) が、自然に声をかけてきた際に、挨拶にはじまる会話の途中で身分証を提示し、私服警官であることを告げら

れた。防犯対策としてかなりの人数の私服警官が警備にあたっていることに感心した。また、都市ボランティアとも多くの交流が出来た場所であり、身分が市観光協会の臨時職員であること、陽気な国柄のせいも、積極的にゲストに声をかけて、お互いに楽しめる雰囲気を感じられ、ボランティア養成や教育の必要性も強く感じた。尚、ボランティア



写真 2-202 セーリング競技 筆者撮影



写真 2-203 浜辺に張られたネット 筆者撮影



写真 2-204 憩いの売店 筆者撮影

²⁹<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%83%83%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%B3> ウィキペディア フリー百科事典 参照

不足のため臨時職員を有給で雇い入れたとも語っていた。東京大会開催時にはボランティアの確保等は必須であるが、品川区における市民ボランティアの確保、養成も必要であると考えます。



写真 2-205 ビーチサッカーを楽しむ 筆者撮影



写真 2-206 スラックライン 筆者撮影



写真 2-207 私服警官 筆者撮影



写真 2-208 市民ボランティアと 筆者撮影

ボランティアの方々との集合写真（写真 2-208）を撮り視察団はフラメンゴ公園内を横切り歩道橋を渡り最寄り駅である Catete 駅へ向かう。途中、サイン（写真 2-209、2-210）が何か所か目に入ったが、その一つは開催から数日で落書きがされていた。

歩道橋はバリアフリーのスロープ（写真 2-211）は整備されているものの勾配があり男性でも車いすを押すのは難儀である。歩道橋は幹線道路の上に弧を描く構造でスロープを後付けしているためバリアフリーの構造上無理があると感じた。品川区内でも後付けでバリアフリーにする場合は行政施設、民間問わず綿密に設計することが肝要である。歩道橋には高いフェンスではなく低い手すり（写真 2-212）が設置されている。下を走る幹線道路に落下する可能性すら感じた造りであった。



写真 2-209 サインに落書き 筆者撮影



写真 2-210 市民ボランティア 筆者撮影



写真 2-211 陸橋のスロープ 筆者撮影



写真 2-212 勾配がある陸橋 筆者撮影



写真 2-213 まちなかサイン 筆者撮影



写真 2-214 庭園内 集合写真 筆者撮影

歩道橋を渡ると幾つかの理解できるピクトグラムを用いたサイン表示（写真 2-213,2-215）を目にした。言葉が分からなくても自分の目的を明確にすることができゲストには有益なものである。行政がこれを設置する場合に国や都、競技大会期間中であれば組織委員会等の統一したものがあるのか。今後、品川区が都市



写真 2-215 庭園内サイン
筆者撮影



写真 2-216 ポケモン
プレイヤー筆者撮影

型観光を推進する際、公共交通を含む区内に他区に先駆けピクトグラムを用いたサイン表示を設置する必要があると考える。

視察団は Jardim Histórico Museu da República³⁰（庭園歴史博物館）の遊歩道を横切り Catete 駅へ向かった。庭園の中では先日解禁になった「ポケモン GO」のプレイヤー（写真 2-216）と出会った。日本でも社会現象になっているポケモン GO は度々ニュースを賑わす。配信する側というより、プレイヤーのモラルが問われると考える。こうした地域配信ゲームを逆手に取り地域の賑わいにつなげることも考えていかなくてはならないと考える。仕掛け方によれば、間違いなく地域の賑わい創出の一端を担うことを感じる。

³⁰ <http://www.museusdorio.com.br/joomla/> 参照

(4) Catete 駅³¹よりビーチバレーボール会場へ³²

視察時間：15：30～17：00



図 2-23 Catete 駅と Cardeal Arcoverde 駅、ビーチバレーボール会場の
位置関係 Google Map より筆者作成

³¹ セーリング会場の最寄り駅

³² 地下鉄（Catete 駅～Cardeal Arcoverde 駅）に乗車し競技会場まで徒歩にて移動



写真 2-217 駅までのサイン 筆者撮影



写真 2-218 エレベーターの入口 筆者撮影

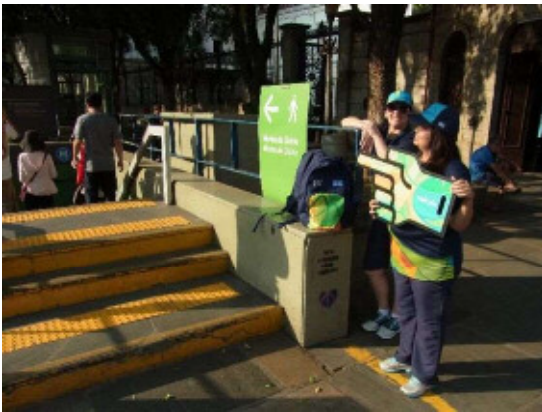


写真 2-219 市民ボランティア 筆者撮影



写真 2-220 路線案内 筆者撮影



写真 2-221 路面サインと点字ブロック 筆者撮影



写真 2-222 路線案内 筆者撮影

視察団は歴史庭園博物館を抜けてセリング会場の最寄り駅でもある地下鉄の Catete 駅へ向かった。バス移動だけではなく公共交通での移動も大切である。(図 2-23 黄は地下鉄、青は徒歩) 道中には駅までのサイン(写真 2-217)も設置され迷わずに向かうことができた。駅近くになると改札に降りるエレベーター(写真 2-218)が設置してあった。バリアフリー後進国といわれながらも競技大会開催のために主要駅には設置したのだろうか。これが全土に広がることを祈る。

エレベーターの先には階段（写真 2-220）の入口があり、そこにも市民ボランティア（写真 2-219）の方がサインを掲げていた。異国の地では有り難い事だ。

階段を下りると点字ブロックや、路面サイン、路線案内等統一感のあるサイン（写真 2-221,2-222）でホームまでエスコートしてくれた。車いすの方がエレベーターに乗る時のための路面サインもあった。何より分かりやすいのが、サインの色が統一されていたこと。品川区内の公共交通は民間と都営があるが、それぞれがバラバラなサインを掲げていたらゲストの混乱を招くことが考えられる。品川区も筆者と同じ問題意識を持ちこの課題をクリアして頂きたい。無事に Catete 駅から地下鉄に乗車（写真 2-223）することができた。乗客は観戦客か通常の移動かはわからないが込み合っていた。4 駅目（写真 2-224）の Cardeal Arcoverde 駅（写真 2-225）で下車した。ホームを改札に向かう途中にも路面サイン（写真 2-226）や乗換案内サイン（写真 2-227）を確認できた。改札に出るまでの間、通気口にはコウモリ（現地の方がバットマンと教えてくれた）（写真 2-228）や路面をプール（写真 2-229）に見立てた演出など、構内もゲストを満足させる構造（写真 2-225）になっていた。



写真 2-223 混み合う車内 筆者撮影



写真 2-224 停車駅 筆者撮影



写真 2-225 Cardeal Arcoverde 駅構内 筆者撮影

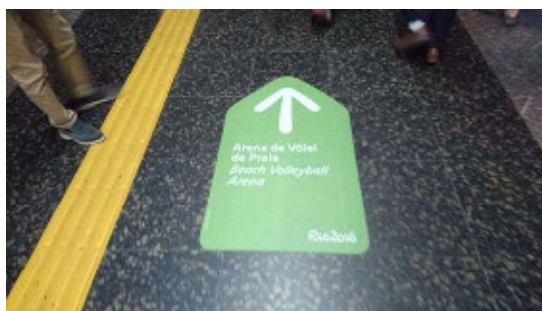


写真 2-226 路面サイン 筆者撮影



写真 2-227 乗換案内サイン 筆者撮影

Cardeal Arcoverde 駅の改札（写真 2-230）を出ると人の流れ（写真 2-231）の大半はコパカバーナ方面に向かった。流れについていけば無事に目的地に到着するのであろうが、まちなかの要所には会場までのサイン（写真 2-232）が設置され迷うことなく足を進めることができる。前述したがまちなかには、目立つ色、統一されたサインがゲストに安心感を与えることは言うまでもない。

駅前の横断歩道に敷設されている点字ブロック（写真 2-233）の一部はコンクリートで覆われ、歩道（写真 2-234）は劣化していた。競技場の最寄りの駅は最低限の整備をする必要があると考える。

競技場を目の前にして人々（写真 2-235）の熱気は最高潮に達していた。コパカバーナ海岸を歩くとサイネージが数か所設置されていて、その一台からはミストが噴出（写真 2-236）していた。夕方になろうとしているが視察初日より涼しさを感じるが、こうした暑さや熱中症対策はゲストにとっても満足であろう。前述したように真夏の東京競技大会は暑さとの戦いである。こうした取り組みは必要不可欠であると考え。

道路を隔て競技場（写真 2-237）を見ても、そのスケール感はけた違いであった。鉄壁の警備である軍（写真 2-238）が競技場周辺に配置されていた。



写真 2-228 通気口のバットマン 筆者撮影

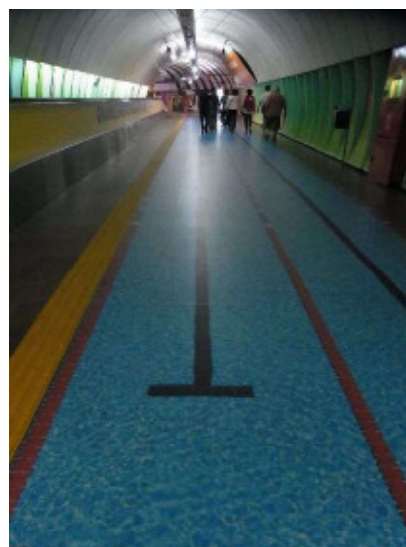


写真 2-229 停車駅 筆者撮影



写真 2-230 Cardeal Arcoverde 駅 筆者撮影



写真 2-231 横断歩道を渡り左折サイン 筆者撮影



写真 2-232 会場までのサイン 筆者撮影



写真 2-233 点字ブロック 筆者撮影



写真 2-234 劣化する歩道 筆者撮影



写真 2-235 会場周辺の人々 筆者撮影



写真 2-236 ミストが出る
サイネージ 筆者撮影



写真 2-237 ビーチバレー会場 筆者撮影



写真 2-238 軍による競技場周辺警備 筆者撮影



写真 2-239 主要幹線道路の渋滞 筆者撮影



写真 2-240 空港への案内サイン 筆者撮影

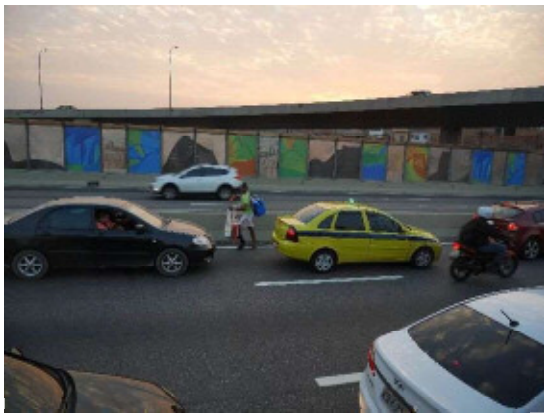


写真 2-241 物売りの少年 筆者撮影



写真 2-242 ファベラに沈む夕日 筆者撮影

視察の全行程を終え視察団は一路 GIG 国際空港に向かった。一時間半(17:00~18:30)ほどの道のりであったが、中心市街地は渋滞(写真 2-239)のため迂回した。空港へ向かうメインの幹線道路ではなかったが、オリンピック開催に合わせて空港までのサイン(写真 2-240)が設置されていた。高速道路上には物売りの少年(写真 2-241)たちが数人いた。渋滞する時間に出没するようだ。バス内からはファベラに沈む夕日(写真 2-242)を見ることが出来た。今回の4日間の行程で走行した距離は約 900 キロであった。リオデジャネイロ市は、渋滞が多く発生し、一方通行が多いため、近

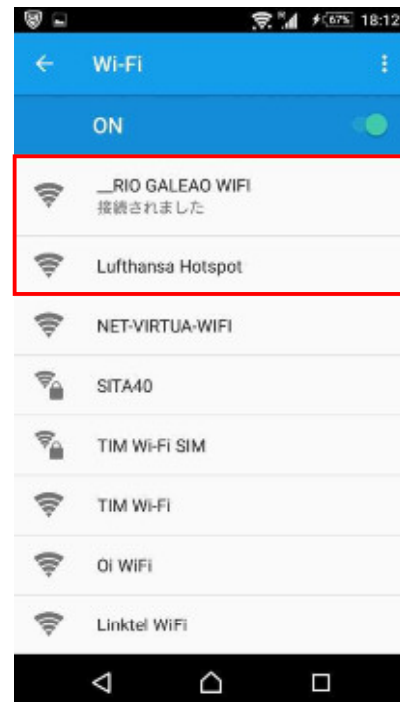


図 2-24 Wi-Fi の受信状況
携帯スクリーンショットを基に筆者作成

くの目的地に行くためにも迂回せざるを得ない現状があった。

18：30 搭乗チェックインと出国手続きを行った。空港内や搭乗するルフトハンザ航空の Wi-Fi（図 2-24）は簡単な必要事項の入力でログインでき、快適に利用することが出来た。

チェックイン後、視察団は総括ミーティングを行い 22：10 に法兰克福トそして日本に向けて出国した。羽田空港到着は約 28 時間後の 8 月 11 日（祝日）日本時間 12：15 であった。

視察を終えて

目的にある競技大会の実施状況を視察し、区の施策に活かすために、主な調査や活動内容、議員の視点を項目別に記載した本報告書を様々な方々に活用して頂けると確信している。本報告書は現地での視察や取材等によって明らかになった貴重な情報や視点、渡伯することによって得た情報等を多分に示した内容であり、「5区議会議員の視点から」では、特にゲストの感覚や視点を意識し、2020東京競技大会に向けた品川区での取り組みをシュミレーションしやすくまとめたものである。

現地でのヒアリング等で感じたことは、世界の人々が持つ日本や東京への印象や期待は、私たちが考えるよりも遥かに好意的であった。2020東京競技大会のみならず、その期待等に応えるために「おもてなし精神」での取り組みをさらに向上する必要性を強く感じた。

「おもてなし」について一例を挙げるのであれば、食事をとる際、世界的な有名チェーン店はもとより、ご当地人気メニューを提供している地元の飲食店に行きたくなることは、ごく普通のことである。そこでは、ポルトガル語が公用語の中、英語表記や写真やイラストで示されていることや店員の丁寧な接客が安心感や親近感を得ることができたことは言うまでもない。さらに携帯電話等の翻訳アプリを使用することによって、スムーズにコミュニケーションをとることが出来た。一方で、ゲストへのコミュニケーションは諸外国では日常的なものであるように感じた。心からもてなすホスピタリティーの追求は我々日本人に欠けた一面なのかもしれない。

今回の視察をうけ、品川区議会オリンピック・パラリンピック推進特別委員会において、各委員より出された要望項目をとりまとめたリストは、大変重要なチェックリストとして有効に活用させて頂いた。

社会基盤整備や経済状況、お国柄や文化の違いを単純比較して今後の品川区（東京）における施策の展開に置き換える事は出来ないが、肌身で実感したことは、2020東京競技大会に向けて主体行政の一つである品川区は、区民をリードする事や区民活動を支える事など「オール品川」「オール東京」で整備を実施する事が必要不可欠であることを確信した。

結びに視察期間中に、取材・ヒアリングを通して多くの人々に出会い、情報等を得た事は、かけがえのない宝であり、心より感謝すると共に、これらの人々に会うことにより、品川区を強くPRすることができ、効果的なシティプロモーションの展開が出来たことも報告する。